

茅ヶ崎市立松浪中学校

研究テーマ：「自ら分かる」を目指した授業研究～生徒を主語にした授業・評価改善～

1 実践の目的

学習指導要領においては、知識及び技能の習得にとどまらず、主体的に学習に取り組む態度、すなわち「学びに向かう力」の育成が重視されている。本校においても、生徒が自ら課題を認識し、他者と関わりながら学びを深めていく力を育成することを重要な教育課題として捉えてきた。特に、学習の目的や意義を理解した上で学びに向かう姿勢を育てることが、持続的な学力形成につながると考えている。

そこで本校では、「児童・生徒の学びに向かう力の醸成」という大テーマのもと、研究テーマを『「自ら分かる」を目指した授業研究 ～生徒を主語にした授業・評価改善～』と設定した。「教師が教えて分からせる授業」から「生徒が自ら考え、気付き、理解を深めていく授業」への転換を図るとともに、評価についても結果のみを値踏みするものではなく、生徒一人ひとりの良さや成長を見取り、次の学びにつなげる評価観への転換を目的とした。

また、本校の学校教育目標である「ふれあい 思いやり 正しい行動」を学習場面において具体化し、学び合いを通して互いに高め合い、支え合うことのできる集団の育成を目指し、校内研究を推進した。

2 実践の内容

(1) 全職員による授業研究の推進

本校では、研究を一部の教員のみで進めるのではなく、全職員が共通理解のもとで

取り組むことを重視した。その基盤として、本校で作成した「松浪 Teaching Standard」を活用し、学び合いの手法、聴き方・話し方のスキル指導、授業のユニバーサルデザイン化などについて、全職員が同一歩調で授業づくりに取り組んだ。

授業研究会では、全教員が公開授業を行い、授業後の協議を通して、生徒の学びの姿を中心に振り返りを行った。また、外部講師として大学教授を招き、授業づくりや評価の在り方について専門的な視点から助言をいただき、研究の深化を図った。

(2) 教科ごとの教科研究

本校では、「学校として指導する」を指針に、教科指導の改善を図った。年間指導計画の作成は、教員ごとではなく教科会で検討し、3年間を見通したものとした。また、時間割の中に各教科で週に1時間、教科会ができる時間を設定し、授業づくりや評価資料などの情報を共有できるようにした。

さらに、各教科において学びのプランを作成し、授業の中でその内容を生徒に説明する取組を行った。学びのプランでは、単元全体の見通しや学習の到達目標、評価の観点に加え、どのような学び方を大切にするのかを明確にし、生徒と共有した。これにより、生徒が自らの学習の見通しをもちながら取り組むことができるようになるとともに、学習の目的や評価を理解した上で主体的に学ぶ姿勢の育成につながっている。

(3) テーマ別グループ研究

本校の課題を「学習活動」「学習評価」「課題設定」「振り返り」の4つのテーマに分け、グループ研究を行った。

「学習活動」では、学びが深まりやすい活動や話し合いの在り方について研究し、課題に応じたペア・グループ活動の選択や、継続的に行う帯活動の工夫について共有した。

「学習評価」では、形成的評価を中心に、生徒の意欲を高め、改善につながる評価の在り方について研究した。ICTを活用したフィードバックや、良い学びを全体に共有する取組を実践した。

「課題設定」では、生徒が主体的に取り組める課題の設定や提示の工夫について研究し、単元を通じた問いの設定や、先入観をもたせずに題材に向き合わせる工夫などを共有した。

「振り返り」では、授業後の振り返りを学びの定着と次の学習につなげる方法について研究し、ICTを活用した振り返りや、単元全体を見通した振り返りの実践を共有した。

3 実践の成果と課題

(1) 成果

本研究を通して、生徒が互いの考えを伝え合い聴き合い、学び合う姿が多く授業で見られるようになった。学び合いを通して理解を深めることで、確かな学力の育成につながるとともに、相手を尊重しながら関わる態度が育ってきている。これは、学校教育目標である「ふれあい 思いやり 正しい行動」を体現する姿であり、高め合い、支え合える集団へと成長している成果であると考えられる。また、学習の見通しや評価を事前に共有することで、生徒が安心して学習に取り組み、自ら学びを調整しようとする姿も見られるようになってきた。

評価の工夫により、生徒が自分の学びを振り返り、次に生かそうとする姿勢も見られるようになってきた。

(2) 課題

職員の入れ替わりにより、研究内容や「松浪 Teaching Standard」の考え方を十分に浸透させていくことの難しさが課題として挙げられる。また、研究や協力体制をさらに充実させたいと考える一方で、日常業務の中で十分な時間を確保することが難しいという現状もある。

4 今後の展開

研究の成果を一過性のものとせず、学校全体の取組として定着させていくことが重要である。そのために、新たに着任した職員に対しても研究の目的や実践内容を丁寧に共有し、共通理解を図っていく必要がある。また、「松浪 Teaching Standard」を校内研修や日常の授業の振り返りの中で継続的に活用し、授業づくりの共通基盤として位置付けていきたい。

さらに、教科研究やグループ研究で得られた成果や実践事例を整理・蓄積し、誰もが参照・活用できる形で共有することで、研究の継続性と再現性を高めていくことが求められる。限られた時間の中でも効果的に研究を進めるため、研究内容を精選し、日常の授業実践や学年・教科の取組と密接に関連付けた校内研究を推進していく。その積み重ねにより、教職員一人ひとりの授業改善への意識を高め、組織としての指導力向上を図っていきたい。

今後も、生徒が自ら学びを振り返り、次の学びへと主体的につなげていく授業の在り方を追究し、「自ら分かる」学びを通して、生徒の学びに向かう力のさらなる醸成を目指していきたい。